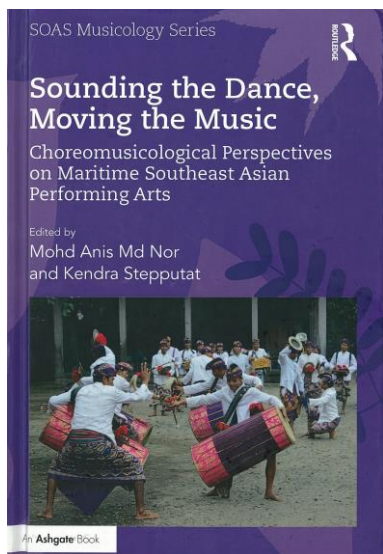


【書評・紹介】

**Mohd Anis Md Nor and Kendra Stepputat (eds.).  
Sounding the Dance, Moving the Music; Choreomusicological Perspectives on  
Maritime Southeast Asian Performing Arts.**  
(Abingdon Oxon: Routledge. June 2016. 194pages. 110 £ . First edition)

井上 淳生



本書は、舞踊 (dance) と音楽 (music) の不可分性を重視した研究 (以下、舞踊=音楽研究) の一環として企画されたものである。ロンドン大学の一部である東洋アフリカ研究学院 (School of Oriental and African Studies; SOAS) の音楽学叢書として刊行されている。編者の 1 人であるムハンマド・アニス・ノールは、近年までマレーシアのマラヤ大学で教鞭をとっていた民族舞踊 (音楽) 学者であり、現在は国際伝統音楽会議 (International Council for Traditional Music; ICTM) の研究部会の一つ (東南アジアのパフォーミングアーツ) で議長を務めている。もう 1 人の編者、ケンドラ・ステプタットは、オーストリアのグラーツ国立音楽大学 (KUG) に在籍し、現在の舞踊=音楽研究を牽引する気鋭の若手民族舞踊 (音楽) 学者である。2 人を含め、

本書の執筆陣には計 14 人の研究者が名を連ねる。彼/彼女らの学問的出自の多くは民族音楽学<sup>1</sup>であるが、研究者として教育を受けた地域はアメリカ、オーストラリア、ドイツ、オーストリア、タイ、マレーシア、日本など多様である。本書が対象とする地域は、東南アジアの沿岸地域 (Maritime Southeast Asia; MSEA) であり、執筆者達は長年この地域でフィールドワークを行っている<sup>2</sup>。

評者と本書の出合いは、2016 年 7 月にオーストリア (グラーツ) で行われた ICTM の民族舞踊学研究部会である。評者はそこで、日本の社交ダンスにおける舞踊と音楽の関係の変化について報告を行った<sup>3</sup>。会期中、評者は多くの民族舞踊 (音楽) 学者と交流する機会を得たが、そのなかに本書の編者であるノールとステプタットもいた。そこで彼らから紹介されたのが本書である<sup>4</sup>。以下、構成を紹介しておきたい<sup>5</sup>。

序文

- 1章 東南アジア沿海地域のパフォーマンスを理解する：導入としての研究パラダイム／言説の再考 (リカルド・トリミロス)
- 2章 スンダ族の舞踊における聴覚と触覚の次元 (ヘンリー・スピラー)
- 3章 バリのケチャック：音と動きの (相互) 関係を事例に (ケンドラ・ステプタット)
- 4章 絶え間ない相互作用：バリの踊り手とドラマー間にみる共生関係の賦活 (マデ・マントル・フッド)
- 5章 カリ...カリ...カリ！：ザピン・ジョホールにおける音楽と舞踊の裂け目を埋めるも

- の (ムハンマド・アニス・ノール)
- 6章 必要とされる (再) 結合：サマの舞踊イガルと伝統合奏クリンタンガンに関する研究レビュー (MCM・サンタマリア)
- 7章 身体を遊ぶ：アチェ州の座り歌・舞踊 (ボディパーカッション) における女性性と男性性の相克 (マーガレット・カルトミ)
- 8章 交点としての身体：バリのアルジャにみる声、身体、音楽の相互作用と協同 (増野亜子)
- 9章 影絵、ドラム、銅鑼：舞台劇における動きと音楽の関係 (パトリシア・マトウスキー)
- 10章 音を踊る、動きを音楽する：北ボルネオにおける音楽と舞踊の文脈依存的対話 (ジャクリーン・プー・キティンガン)
- 11章 コミュニティ、アイデンティティ、変化を公演する：躍動する中国龍舞 (タン・スー・ベン)
- 12章 グンダン・ブレ：インドネシア、ロンボクにおける音楽／舞踊形式の交渉 (デイヴィッド・ハーニシュ)
- 13章 ウラク・ラウオイのペラチャク：音楽と動きは、かつての「海の半遊牧民」と、失われつつある彼らの歴史・環境・自然をどのように結び付けるのか？ (ローレンス・ロス)
- 14章 揺れ動く音楽：サマ・ディラウトにとってのパフォーミングアーツ、空間、移動 (ビルギット・アーベルス)

2人の編者による序文に続き、1章では本書の枠組みや意義が総論的に述べられている。2章以降では、各執筆者による13のケーススタディーが配されている<sup>6</sup>。一見して明らかのように、ほとんどの章で舞踊(動き)と音楽(音)の関係、あるいはそれらの体现者である踊り手と演奏者の関係が主題化されることがタイトルに反映されている。

序文を参考にして、本書に通底する問題意識を評者なりに表現し直すならば、次のようになろう。「舞踊と音楽が一体 (a single entity) であることを踏まえたうえで、両者が混ざり合う (intermingle) 様相を、いかに既存の枠組みに還元せずに分析・理解することができるのか」というものである。ここでいう「既存の枠組み」には、一方には、対象を主に「動き (movement)」に還元する傾向にあった舞踊研究の分析枠組みがあり、もう一方には、「音 (sound)」に還元する傾向にあった音楽研究の枠組みがある。本書の出发点となる「既存の枠組み」の問題点とは、現実に目にするのは舞踊(動き)もしくは音楽(音)が混ざり合った状態がほとんどであるにもかかわらず<sup>7</sup>、舞踊、音楽いずれか一方に最終的な軸足を置くことによって、研究者によって舞踊あるいは音楽と認められなかった現象が周辺化され、複合的である眼前の現象をとらえそこなうという点である。

以下では、個別事例を扱った2章以降の内容について紹介しておきたい。ジャワ島西部のスンダ族の舞踊を対象とした2章では、舞踊と音楽をとらえる際に参照されることの多かった「視覚」や「聴覚」ではなく、「触覚 (tactile dimension)」の可能性が議論されている。続く3章では、バリのケチャック (Kecak) を事例に、動きと音の関係のあり方を分析するための枠組みが提示されており、舞踊＝音楽研究 (Choreomusicology) の理論構築

に向けた野心的な議論が展開されている。同じくバリを舞台とした4章では、踊り手とドラマーが何によって結び付くのかを問うとともに、両者は何によって引き離されるのかという逆方向の問いが考察されている。

5章では、アラブの影響を受けたマレーシアのザピン (*Zapin*) が取り上げられている。著者のノールは、主にジョホール州 (マレー半島南部) で広く見られるザピンを「遊び (playing a game)」にたとえ、「音楽する (musicking)」と「演じる (performing)」という2つの側面から考察している。6章ではMSEAの中央部に散居するサマ (*Sama*) の人々に焦点が当てられている。ここでは、彼らの間で行われる舞踊 (*igal*) と合奏 (*kulintangan*) についての研究史が検討された後、両者の間に見られる対応関係が、身体の部位、楽器、ジャンル名等に基づいて考察されている。7章で取り上げられるのは、スマトラ島北部のアチェ州における座り歌-舞踊である。筆者のマーガレット・カルトミは、女性と男性の動きの違いに注目し、写真・イラストを使用しつつ両者を比較している。8章では、バリの歌舞劇アルジャ (*arja*) を構成する踊り手・楽器演奏者を対象に、自身達の声あるいは音楽、そして身体を介して展開する交流の様相が描かれている。

マレーシアの影絵劇に注目した9章では、影絵劇の音楽と人形の動きの非対称性 (影絵劇の音楽は人形の動きなしでも成立するが、逆は必ずしもそうではない) に焦点を絞つつ、上演中のパペッター (人形使い) と演奏家の関係が分析されている。10章ではボルネオ島北部サバ州に主に居住するバジャウ (*Sama-Bajau*) の人々を対象に、文脈を重視した分析が行われている。音楽 (音) と舞踊 (動き) が混ざり合うことを可能にするような文脈とはどのようなものか、といった問いがここでは考察されている。続く11章では、マレーシアの華僑の間で伝承される龍舞が取り上げられ、龍舞の公演を通じた華僑コミュニティの生成過程が、音と舞踊の観点から描かれている。12章では、ここ30年の間で若者に人気を博すようになったグンダン・ブレ (*Gendang beleq*) の変化を鏡にして、ロンボク島の社会・政治的な変化が考察されている。現地の言葉で「海の民」を意味するウラク・ラオイ (*Orak Lawoi*) の人々に注目した13章では、彼らの主要な祭事であるペラチャク (*pelacak*) が取り上げられている。この行事における音楽と動きの関係を分析することを通して、彼らが自身の歴史を継承する過程および外部の環境への適応の様相が描き出されている。最終章となる14章では、「家船 (houseboat)」を生活の拠点としてきたサマ・ディラウト (*Sama Dilaut*) の人々による舞踊と音楽の実践が取り上げられ、音楽が時間軸上だけでなく空間軸上に展開される活動でもあることが強調されている。

以上、本書の内容を簡単に紹介したが、実に様々な角度から舞踊と音楽の関係の分析が試みられていることがお分かり頂けるだろう。

最後に、1点だけコメントしておきたい。それは「ミュージッキング (musicking)」という概念の扱いについてである。索引にもあるように、この語は5章・10章・14章で用いられている。動詞として使用されたこの語の後には、「楽器」(5章)の他に「動き」(10章)や「空間」(14章)という目的語が配置されており、おそらく「音楽する」を、通常用いられるような「演奏する」あるいは「音楽 (作品) を創作する」以外にも拡大しようという意図が込められているように見える。これは、舞踊と音楽のいずれかに収斂する傾向にあった既存の枠組みを更新する際の一つの方向を指し示している。

ただ、評者がこの語を聞いた時に最初に思い浮かべたのは、音楽学者のクリストファ

ー・スモールによる「ミュージッキング (musicking)」である。管見の限り、スモールはこの語を学術用語として取り上げた最初の人物であり、日本へは人類学者の野澤豊一らによって紹介されている。本書ではスモールについて言及されておらず、評者はこの点が気になった。

スモールによれば、ミュージッキング (音楽する) とは「どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加すること」(スモール 2011: 30-31) であり、この中には演奏すること、聴くこと、リハーサル、練習、パフォーマンスのための素材を提供すること (作曲等)、踊ること、さらには楽器を運搬すること、会場を維持すること (掃除等) も含むという (同上)。

本書で使用される意味も、スモールのそれと方向性を同じくしているように思える。では、本書でいうミュージッキングとスモールのそれとの共通点や違いはどのように議論されるのだろうか。この議論によって、今後の舞踊＝音楽研究の進展に資するような新たな語彙が生まれる可能性はないだろうか。ぜひ著者達と議論してみたい。

本書を一つの契機として、今後は舞踊と音楽の結びつきに関する事例研究、およびそれらの検討を経て舞踊＝音楽に関する独自の理論構築が進められていくであろう。評者はそこに連なる研究を続けていきたいと願う者の 1 人である。

## 注

1. 人類学において舞踊は民族音楽学のなかで研究されてきた経緯があり、民族音楽学の中で舞踊研究に特化したものは民族舞踊学 (ethnochoreology) と呼ばれてきた (金光 2016: 24)。その後、1960 年代より舞踊に焦点化した舞踊人類学が立ち上がる。この間の経緯については井上 (2017) を参照されたい。
2. 本書の特徴の一つである MSEA というグルーピングは、特定の国民国家や国境に必ずしも基礎付けられない人々の間で行われる舞踊と音楽の実践に目を向けさせる点で有益である。
3. 報告のタイトルは、'What has come from the standardization of dance?: An inquiry into the relationship between dance and music in ballroom dance in Japan' である。報告の一部は、当日の指摘をもとに井上 (2018) としてまとめられている。
4. 「舞踊と音楽」をめぐり、他にも関連する著作を紹介してくれた研究者がいる。たとえば、スウェーデンの民族舞踊学者マツ・ニルソンである (Eriksson and Nilsson 2010)。
5. 日本語への訳出は評者による。
6. 本稿では、本書で使用される dance、music をそれぞれ「舞踊」、「音楽」として、movement、sound をそれぞれ「動き」、「音」として訳出している。
7. 少なくとも MSEA に見られるパフォーマンスの多くは、舞踊／音楽のどちらか一方のみの視点からでは理解することができない、ということが本書の出発点である。

## 参考文献

Eriksson, K and Nilsson, M

2010 Ethnomusichoreology? Ethnochoreomusic?. *Crossing Over: Fiddle and Dance Studies from around the north Atlantic* 3: 260-264.

井上 淳生

2018 「踊り手にとっての舞踊と音楽の齟齬—日本の社交ダンスにおける『カウント』を事例に

- ー」『舞踊学』40、印刷中。
- 2017 「舞踊人類学と舞踊民族誌」『文化人類学』81(4): 690-703.
- 金光 真理子
- 2016 「音楽と舞踊」徳丸吉彦監修、増野亜子編『民族音楽学 12 の視点』音楽之友社、東京、22-35 頁.
- スモール・クリストファー
- 2011[1998] 『ミュージッキング-音楽は<行為>である』野澤豊一、西島千尋訳、水声社、東京 (Small, Christopher, *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*. Wesleyan University Press.).

(いのうえ・あつき／北海道地域農業研究所)